

文 國 大 子 女

第百三十七号

平成十七年六月発行

人麻呂歌集の使者の歌……………	江富範子(一)
——「道行く人」(二三七〇番歌)をめぐって——	
託宣和歌を考える……………	八木意知男(三)
——祇園神託宣和歌を例にして——	
継子の麻姑……………	中前正志
——『蓬萊物語』の挿話をめぐる	一村晶代(四)
二、三の憶測から『懷硯』へ——	廣政愛
近松の俊寛像と『源平盛衰記』……………	正木ゆみ(七)
『点と線』と『時間の習俗』の間……………	加納重文(九)
——松本清張私論①——	
後深草時代の女性……………	須田亮子(二七)
彙報……………	(三三)

彙報

国文学会行事

○新入生オリエンテーション

四月四日(月) 午後三時三〇分〜 於B501

○優秀論文発表会

五月七日(土) 午後一時〜 於J420

『源氏物語』における女君への催馬楽引用

藤井 美幸氏

頼朝及び義経像の形成に関する一考察

高橋小百合氏

―『平家物語』における―

野上弥生子論―沈黙の作用―

内田 舞氏

○春季公開講座

五月二十六日(木) 午後二時四十五分〜 於J224

講題 敗戦前後の太宰治

講師 早稲田大学教授 東郷 克美先生

○新入生歓迎行事 「狂言鑑賞会」

六月十八日(土) 午後一時〜

会場 京都女子大学音楽棟二階演奏ホール

演者 茂山七五三先生 茂山千三郎先生

茂山宗彦先生 茂山逸平先生

プログラム 解説・「清水」・「濯ぎ川」

研究室だより

○本年三月末日をもって、川端善明先生と笹川祥生先生が退職されました。今後ますますのご健勝とご活躍をお祈りいたします。

○本年四月一日より、小林賢次先生と新聞一美先生に新たに御着任いただきました。小林先生は国語学を、新聞先生は漢文学を、各々担当されます。本号には、両先生より御挨拶文をお寄せいただきました。

○昨年度一年間、天理大学にて内地研修されていた山崎ゆみ先生が、元気にもどつてこられました。早速運営委員として御活躍いただいています。

○今年度一年間、田上稔先生が京都大学にて内地研修されます。鋭気を養われて、来年度にはもどつてこられます。

○本年度の国文学科の主任は工藤哲夫先生で、坂本信道・山崎ゆみの両先生とともに、学科・国文学会の運営にあたられています。

二 挨拶

小林賢次

本年四月に国語学の教授として着任いたしました。専門は国語史で、条件表現など中世から近世にかけての語法や語彙、大きく言えば古代語から近代語への変遷を追っています。狂言のことばも中心テーマの一つで、近年は諸台本の資料性の考察にも力を入れていきます。学生の皆さんに、ことば、日本語、そしてその歴史のさまざまについて探り、考えていく楽しさを伝えられたらと思っています。

前任校は東京都立大学です。新大学への統合のため、人文学部は廃止の方向に向かってしまっています。ずっと国立大学・公立大学勤めだったため、私学の女子大というのは、まったく新しい環境です。少人数教育で主に大学院生の指導を中心に行っていた生活から、多数の卒論ゼミ生を抱える身となつてとまどうところも多いのですが、何かと新鮮な経験をしています。

自宅は神奈川県茅ヶ崎市にあり、週の真ん中を京都で過ごし、週末は自宅に戻るといふ新幹線通勤をしています。ノートパソコンを購入し、車中でも寸暇を惜しんで利用する、これぞサラ

リーマンスタイルだと意気込んで実行してみたのですが、すぐに頭痛がして、無理なことはするものではないと悟りました。車内ではゆっくりくつろぎ、軽い読書、これが最適です。

古都京都是、魅力あふれる地。五月の連休の際、大学付近の智積院・妙法院などの特別展を拝観したり、壬生寺ではじめて壬生狂言に触れたりして、いままさに京都で生活をしているのだと実感しました。諸事多忙でなかなか折を得ませんが、時にはゆつくりとあちこちを散策したいものと思っています。

伝統のある大学の一員に迎えていただき、微力ながら精一杯努力していく所存です。よろしくお願い申し上げます。

二 挨拶

新間一美

この四月に着任いたしました。神戸の六甲山山麓の甲南大学で二十五年間勤めて来ましたが、人生の折り返し点を過ぎ、後半は京都の地で研究を進めようということで転職を決めました。

勤務先は神戸でしたが、大学入学以来三十数年間京都に住み続けています。それまでは東京にいて小・中・高校時代を送りまし

た。生まれたのは母の実家のあった千葉県船橋市で、すぐに父の仕事の関係で札幌に行きました。幼少期の七年間を北海道で過ごしたのは良い思い出です。藻岩山の麓でスキーをしたり、郊外に出て魚捕りをしたりして、存分に自然に親しんでいました。

京都女子大には、二十年ほど前に研究会で月に一度お邪魔していました。また、十年ほど前には非常勤講師として二年間お世話になりました。国文学科の先生方も以前からの知り合いが多く、その点親しみがありません。

授業は主に漢文学を担当します。専攻は平安朝文学における中国文学の受容の研究が中心です。具体的には、『源氏物語』に白居易（白楽天）の詩がどのように利用されているか、『古今集』の和歌に漢詩の表現がどのように関わっているか、というような研究をしています。最近では、菅原道真の詩に本格的に取り組みたいと思っております。

白居易は、平安朝以来の日本人がもつとも好んだ唐の詩人です。その作品は平明でかつ繊細なところがあり、菅原道真のような漢詩人ばかりでなく、清少納言や紫式部のような女流にも深く愛されました。詩文集である『白氏文集』を読むと彼の人生全体が分かります。作品の一つひとつが日本人の心の琴線に触れたということはもちろん、人生の在り方に至るまで規範とされたところ

ろがあり、日本における白居易の影響は文化的な側面も含めて、極めて大きいと言えます。平安朝の文学は主に京都で生まれたため、京都の地で白居易文学の受容を考えることは私にとって意味があることなのです。

その白居易の人生の中で、揚子江沿いの江州の地に左遷された一時期がありました。その折、南に聳える廬山の山塊と北を東流する揚子江の流れとを眺めつつ、その「山」と「水」から存分に詩人として靈氣を受けたい、という詩を作っています。

私も、より身近になった優美な姿の東山と、清らかな鴨川の流れから靈氣を受けつつ教育・研究に取り組みたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

二〇〇四年度博士（文学）学位論文題目

『明暗』における「技巧」をめぐって

中村（濱戸）美子

良源像の変遷

畑 中 智 子

二〇〇四年度修士論文題目

陸奥国歌枕の形成

高 橋 明 子

志賀直哉の小説における人物設定

角 美 樹

—イニシャル・偽名などを通して—

『彼岸過迄』論—人間の関係性を軸として—

荻生徂徠の楽府考—擬古楽府十四首を中心に—

秋成における中国古典の受容

西 クニヨ

矢野 志保美

李 婷

柿本人麻呂—歌の聖なりける—

百首歌に関する考察

—堀河百首が与えた影響とは何か—

西行全集による花の歌

小大君集の成立の研究

紫式部の人物像—『紫式部日記』から—

黄泉国と根堅州国

福井 章子

道下 弥生

吉川 千尋

田本 文

上田 真理子

岡本 佳子

金澤 優

福田 真恵

内藤 朋子

見上 直子

渡部 真由美

稲垣 賀恵

奥本 紗千恵

古 代

二〇〇四年度卒業論文題目

平賀元義再考—美作における旅の目的と意義—

歌語「籬」とは—歌中に及ぼす籬の効果—

「いくき」について

アユと文学

「栢梨」再考

「根合」の目的—端午と菖蒲の関係を中心に—

倭太后作聖躬不豫之時の歌二首

小野小町と閨怨詩—『小町集』と勅撰集から—

草壁皇子舍人等挽歌群の再考

—二十三首の分類について—

詞華和歌集十二番歌「小笠原みつの御牧」考

百人一首における定家の選歌意識

—月の歌を中心に—

赤堀 佐和子

安樂 佳代

宇高 千晶

大棚 陽子

大野 菜穂子

黒田 みずほ

宅 和美保

中野 里映

三宅 絵梨

山崎 弘子

小阪 知子

—『古事記』編纂の目的という視点から—

『枕草子』と『徒然草』の相違

『源氏物語』蜻蛉巻考—女一の宮を中心に—

『源氏物語』論—浮舟の呼称について—

二条の后と二条の后物語—『伊勢物語』を中心に—

紫の上から浮舟へ—「形代」の女に託したこと—

『大鏡』における師輔像の考察

朝顔の姫君論

—かたくなな結婚拒否から見えるもの—

「四位になしてんと思し」考

—『源氏物語』夕霧の最初の位階について—

夕顔巻「心あてに」の和歌の解釈

出産と物の怪

中島 厚子

福井 章子

道下 弥生

吉川 千尋

田本 文

上田 真理子

岡本 佳子

金澤 優

福田 真恵

内藤 朋子

見上 直子

渡部 真由美

稲垣 賀恵

奥本 紗千恵

木村 絢子

久保 公美

典葉助への報復

迫 絃子

—『平家物語』諸本より—

—落窪の君の唯一の感情表現と世間の認識—

天神信仰の庶民化—天神縁起からお伽草子—

澤田 麻利子

『和泉式部日記』における「つれづれ」

竹上 陽子

頼朝及び義経像の形成に関する一考察

高橋 小百合

落窪物語における雨夜の婚儀について

仲西 佐織

—『平家物語』における—

多田 清里

『細流抄』における和歌評価の基準

西川 朋子

祇園祭における山鉾—鈴鹿山の伝説より—

平田 直子

—『源氏物語』葵巻「袖ぬるる」の歌をめぐる—

『閑居友』にみられる慶政の人間像

星野 美希

「やむことなき御願ひ」について

濱井 裕美

—不浄観説話を中心に—

道場 夕美子

—女房像をとおして—

酒吞童子の原像—登場人物からの考察—

安原 千尋

紫の上の結婚

福島 万智子

武士道の形成と中世武士の姿について

四谷 桜子

光源氏論—紫の上に追い求めた女性像—

藤井 久美

—『太平記』に於ける武士の描写から—

『源氏物語』における女君への催馬楽引用

藤野 智子

『病草紙』について—なぜ『病草紙』は描かれたか—

笠井 祥子

とりかへばや物語における作者の方法

若林 まい子

中世の鬼女—恋愛における嫉妬心—

加藤 安希

—女一の宮の出家を焦点に—

『物くさ太郎』小考—中世庶民の創造—

北岡 佐和子

落窪の君の結婚をめぐる

白井 李佳

仇討ちと雷—『曾我物語』の検討—

六地藏をめぐる人々

葵の上死後の光源氏の服装について

上野 華代

—『山城州宇治郡六地藏菩薩縁起』と『雍州府志』—

—喪服の色があらわすもの—

中 世

『義経記』における静と義経の絆

森 島 彩子

『信長公記』の姿—「本記十五巻」を中心に—

河野 陽子

—巻第五「判官吉野山に入り給ふ事」を中心に—

中世期における「子ども」考

國澤 和加

「河内国交野郡寝屋長者鉢記」

—諸本中での位置付けと成立の背景—

「木曾最期」における考察

山本 みお

近 世

『冥途の飛脚』立ち聞きの場面について

—観客の視点から—

朝子 明奈

『鐘の権三重帷子』論

大久保 敦子

八右衛門論—その人物像における諸問題—

大西 貴子

『曾根崎心中』論

北川 加奈子

『本朝二十不孝』—巻三の四を中心に—

小早川 幸子

『五十年忌歌念仏』論

篠崎 裕美子

—勘十郎の人物像をめぐって—

篠崎 裕美子

『冥途の飛脚』論—新口村の段—

下山 裕子

秋成「吉備津の釜」と吉備の伝説

坪井 美樹

秋成『去年の枝折』論—その執筆目的と俳諧観—

寺内 由美子

『日本永代藏』考—没落・失敗談を中心に—

徳永 雅美

『英草紙』論—第四篇を中心に—

藤井 裕子

秋成作品の悲劇と特質—『死首の咲顔』を中心に—

松岡 優輝

秋成の『源氏物語』観—『ぬば玉の巻』を中心に—

松口 加奈

吉野・夕霧・三笠考—西鶴理想の遊女像—

安田 直

秋成と「青頭巾」—その創作意識をめぐって—

石川 千鈴

『蛇と女性』—秋成真女子像を手掛りに—

笠原 元子

秋成・宮木像の形成

西田 真弓

『絵本龍門の瀧』考

—近世上方子ども絵本の世界と趣向—

島田 佐保

近 代

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論

—食欲と性欲の関わり—

浅野 正子

『死海のほとり』論

—遠藤周作とイエスとキリスト教—

安藤 彩

尾崎翠と少女小説

—「第七官界彷徨」へのつながり—

磯 祥子

泉鏡花『春昼』『春昼後刻』論

—「蛇」と「鬼」の問題をめぐって—

宇田 茉莉恵

伊藤整の求める「自由」について

岡崎 由季

武者小路実篤の描く女性像と恋愛観

上久保 敦子

—「お目出たき人」「友情」「愛と死」に見る—

谷崎潤一郎「刺青」論—時代背景と刺青を中心に—

安岡章太郎 劣等感の考察

梅崎春生の描く「罪悪感」について

廣津和郎論—「神経病時代」と妻をめぐって—

葛西善蔵「湖畔手記」論

黒島伝治研究—シベリア出兵作品における伏字—

田村 千香子

林芙美子の女性観―「浮雲」を中心に―	為保直子	―「人面痘」を中心に―	
法が見逃す殺人―江戸川乱歩の短編を中心に―	仁科享子	内田百閒『冥途』論	森崎奈穂
有島武郎「カインの末裔」論	西堀直美	―『冥途』における百閒の世界―	
―仁右衛門への寄り添いについて―		菊池寛「真珠夫人」論―その読者と時代背景―	矢部和美
金子みすゞ評価の過程について	西山陽子	「ねじまき鳥クロニクル」における猫の役割	山本浩子
―雑誌『童話』を中心に―		三島由紀夫『天人五衰』について	湯川直美
泉鏡花「龍潭譚」論―鏡花の感情世界―	畑美穂	―安永透と結末の謎を中心に―	
谷崎潤一郎「刺青」論	坂東加恵	「痴人の愛」論―ナオミを主体として―	吉田真梨子
広津和郎「神経病時代」論	弘畑恵美	『ぼくは王さま』シリーズ論	渡辺あづみ
葉山嘉樹論―「散歩論」をめぐって―	深尾久美子	―昔話との比較を通して―	
『草の花』における愛の考察―千枝子を中心に―	福田書子	太宰治「グッド・バイ」―未完絶筆の真相―	岩城久美子
江國香織の考える〈自立〉論	藤田美紀	野上弥生子論―沈黙の作用―	内田舞
―「テイスト・オブ・パラダイス」の〈柚〉を中心に―		梶井基次郎「檸檬」―「私」についての檸檬―	金子奈美
夏目漱石『三四郎』論	藤本安奈	「春昼」の玉脇みを像―那美とオフェリヤをめぐる―	須田万里江
―野々宮と陸上運動会を中心に―		太宰の求めた家庭―出ていく父、帰る父から―	高橋直子
果て無き山―『氷壁』から敷衍して―	堀部有美子	北條民雄と「いのちの理論」	中桐郁江
悪人のイメージからの解放	前田有香	「銀河鉄道の夜」論―「青年と姉弟」を中心として―	西野紀子
―山本周五郎・平岩弓枝の意次像―		梶井基次郎のパーソナリティ	牧沙弥香
泉鏡花「琵琶伝」論	増田順子	―小説草稿「猫」に見る明と明について―	
谷崎潤一郎にとっての映像論	武藤絢子	「銀河鉄道の夜」論―改作、変容とその意味―	室彩水

鳥捕りの表と裏の姿

若松 由季

オノマトペによるイメージ伝達能力

佐賀 あゆみ

—童話「銀河鉄道の夜」と「撰受折伏」から—

—その他の記号との違い—

国語学

出雲方言の残存状況

品川 摩耶

小川洋子が選ぶもの—静かな侵食—

遠藤 恵

—高校生における男女での差について—

否定に呼応する副詞について

大塚 優子

現代社会に広がる「おかしな敬語表現」

須原 由貴

心の鏡—中世詩の〈空〉を見上げて—

加藤 瑠衣

—京都女子大学における敬語の意識調査—

人称詞からみた世話浄瑠璃の構成

澤口 昌子

敬語の変遷について

瀧口 真裕美

谷崎の初期文体—入口としての異空間—

筒井 奈緒子

—国語科教科書における表現の変化から—

女性の名前について

中原 知子

若者の歌詞と若者言葉の類似性

多田 千晶

悪態—コミュニケーショナル・ツールとしての可能性—

平中 幹子

—若者の共感する歌詞とその要因の分析—

南吉童話—〈他者とのつながり〉を求めて—

藤田 知子

「若者言葉」の現状と実態

田村 舞

「手」に関する動詞の語義記述

松原 早希

—京都女子大学生への使用状況調査より—

連体形終止の構造と働き

森川 嘉子

方言と共通語の使い分け

長尾 陽子

白秋の童謡表現—『赤い鳥』を中心に—

吉永 麻美

—京都女子大学文学部国文学科における—

「橋」の表現—神の橋から人の橋へ—

吉永 紗織

移住における使用言語の変化

児子 雅美

遠州の推量助動詞

大石 さやか

—京都女子大学の場合—

若年層における湖北方言の現状

大塚 瑞木

「ことわざ・慣用句」のこれから

西嶋 芳枝

ジャンケンについて—拳遊びの歴史と掛け声—

川元 彩美

—女子大学生を対象とした調査より見えてくるもの—

奈良市における方言の現状—アンケート調査より—

木村 友子

女子大学生からみた若者ことば

西田 茜

若者のことばについて

蔵野 有加

—京都女子大学におけるアンケート調査をもとに—

明治期における言文一致運動の推移 林 沙織

—明治二十年代と三十年代の意識の違い—

敬語の誤用と変化 福原 知子

—現代の若者が持つ敬語意識から—

宇治市大久保のことば 松室 友香理

—義務教育段階におけるアンケート調査—

俚言認知率の世代格差—大分県宇佐地区にて— 湊 多恵

現代におけるカタカナ語の考察 森 さつき

卒論体験記

大国卒 内田 舞

一、二回生のレポートでは、あたりまえのように人の文章を自分の文章と混ぜて書いていた。ある時担当の先生に、この中で自分の考えはどれなの？と聞かれて、どこにも自分の意見はなくて全部人の意見であったことに気付いた。

三回生の演習では、人の文章と自分の文章を分ける方法を学んだ。それは、人の文章を引用する際にはきちんと出典注をつけるというものである。引用文にはカギカッコをつけ、どの本のどの

ページから引用したのかを示す。そうすれば人の文章がどこからどこまでなのか一目で分かる。ゼミを通して、人の文章をあたかも自分の文章のように書くことは、剽窃、盗用といって大変悪いことであるという認識を持った。一つの論文を追跡調査していくと、出典注をつけていないのに他の本と文章が一致していたり、同じアイデアを表現を変えて使っていたり、剽窃、盗用が数多く見つかった。論文に引用されている引用文の出典を一つ一つ確認していくことで、引用された文章は書かれた文章の一部でしかないこと、文章は前後の関係で判断しなければならぬということ、引用は正確でなければならないことを学んだ。

四回生のゼミに私は近代文学のゼミを選んだ。それまで全く知らなかった野上弥生子という作家を選び、その全集を一卷から順に読んでいくことになった。全集は四回生の四月までにはすべて読み終わらなくてはならなかったが、私は読めず、夏休みの課題の論文の追跡調査によって一通りの作品に目を通すことができた。追跡調査とは、自分のテーマに最も関連する論文を一つ選び、それを調査し批判するというものである。批判はどんなに些細なことでもよく、批判点を見つげるために、論文中の言葉の意味調べ、年譜の利用による年代の確認、引用文の確認などを行った。追跡調査には、論文中に引用されている作品は必ず目を通し

て、梗概を八〇〇字以内にまとめるといふ作業があつた。これは骨が折れる作業であつたが、私の場合はこのおかげで作品に目を通すことができた。

ゼミで常言われたことは、他説を賛成する方向で引用してはならないということであつた。これには三つの理由を教わつた。

一つ目は論文の目的は新説の発表にあるので、すでに発表されたことを繰り返しても新鮮さが無いということ、二つ目は論文の筆者と同じくらいの知識を持っていて初めてその論文に賛成できるということ、三つ目は他説を自説の根拠とすることは、説という不確実なものの上に自分の論を展開させることなので、確実とはいえないということである。他説は批判する方向で引用すべし、というのがゼミの一貫した方針であつた。先に述べた論文の追跡調査は、まさにそのための練習であつたのである。

実際に、他説に反対しようとする、自ずと反対意見を裏づける証拠を示さなければならぬ。これは論文を書く時にはとても大切なことであると思う。論文では論の根拠となる論拠があつて初めて自分の意見を述べることができるのである。論拠は、誰がみてもそうだと言へる客観的なものでなければならぬ。一般論や個人的な偏見ではなくて、確実な事実でなければならぬ。確実な事実とは例えば作者にまつわる伝記資料がそうである。先行

論文には、作品研究に関するものと、作家の伝記研究に関するものと二種類あるが、その後者のうち確実と言えるものなら論拠としてよいと教わつた。また、作品研究で最も論拠となるのは、その作品自身である。作品をどう解釈するか、どこに光を当てるかはその人の自由である。それを、作品資料や伝記資料、その他様々な資料の中から自分に必要な資料を選び、論拠として引用し、説明していくということが、論文を書く上での面白さであり、また難しさであると思う。

そのためにも、材料を集めることが大切である。一つ一つの作品に目を通すという地味な作業の中から、一つ一つの材料が生まれてくる。私の所属していたゼミでは、この材料集めの方法として、まず最初に作品を読み、次に先行論文を読むという方法がとられていた。そしてその都度、大切なところはカードに書くように言われた。カードの取り方は、梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書）を参考にしよう紹介された。初めはカードに何を書いていいのか分からず戸惑つたが、そのうち、あまり難しく考えず、何となく面白いと思つたところを書くようになった。カードが何枚も重なるにつれて、その内容にいくつかの共通点が見つかった。その中の一つは作品中にみられる沈黙の場面だった。黙っているのにお互いのお互いに対する気持を、お互いが知って

いるという場面は、私の最初のテーマになり、人物の関係が沈黙のうちに相手の意志を想像しあって進行する関係であることを述べていった。これは、初めに面白いなど思っていたことを形にしていくことであつたので、出来上がった時はとても嬉しかった。

作品を読んで思ったこと、感じたことを書いたカードが卒業論文の土台になった。カードに書くことは、頭の中で漠然と感じているものを、形にしていくことである。形にしてみると、その形が思ったよりも小さなことであつたり、いざ書こうとしても書けなかったり、もどかしい思いを何度もした。曖昧なものを形にすることはとても難しいが、その断片でも形に残しておく、後になって思わぬところで役に立ったりするので、やはり形にするということは大切であると思う。自分が面白いと思ったことを、人にも感じてもらえた時は本当に嬉しかった。自分の中にある漠然としたものが形になったとき、初めて人に伝わるといふことを実感した。形にしなければ伝わらない。そのために論文はあるのだと思う。

卒論体験記

大学院博士前期一回生 高橋 小百合

「終わったら倒れるまで飲んでやる」

そう思つて十二月二十日までの日々を堪えた。風邪ひとつ引くわけにはいかないという緊張感、遅々として筆の進まない焦り、加えて学内で見かける楽しそうな一、二、三回生の姿。時間が止まらないものかと思つた。机の抽出を開けたらあの猫型ロボットが出てきてくれないかと思つた。「できません、書けません、出せません」。ゼミの度に先生に泣きついた。

もっと早く準備していたら。それはもう思い返しても詮ないことだ。得々として言うようなことではないかもしれないが、入学以来（あるいは以前から？）着々と卒論準備を進めている大学生なんて、ワシントン条約に保護されてしまうレベルの少数派だろう。多分。

計画性のあるなしというのは向き不向きの問題で、善悪で割り切れることではない。もちろん途中で何がどう転ぶかわからないから、ある程度の余裕を見ておくことは必要だが、何月までに何を、どこの段階まで進んでいなければならないというような

「卒論執筆計画モデル」に、それほど振り回される必要はないと思う。少なくとも私は勝手にそう信じて書いていた。論文を先に蒐めるか自分の論をまず確立するか、各章ごとに少しずつ書き溜めるか一気呵成に書いてしまうか、細かい方法論はいくらもあるが、それはテーマによるし書き手の性格にもよるだろう。卒論は完成させることだけが王道だと、私は思っている。

そう思った結果冒頭のような苦しい状況に陥ったのかもしれないが、何せ「卒業回生になるまで何も考えていなかった」学生は実に心強いばかりの超多数派なので、私も苦しみはしたものの、どこかで大方こんなものだと思つてさほど落ち込みはしなかった。今になつて思うのだが、卒論の追い込み時期は、卒論を書くという行為そのものの疑問、書き手としての自分への失望に囚われたらもう書けない。「忙しい私がかっこいい」ぐらいの、微妙に被虐趣味な自己陶醉が必要である。きつと。

どのみち書くものは書かねばならないのなら、多少とも自分の楽な方法をとるのがよいと思う。定められている以上の規範を自分に課しすぎては、とても一年間（中には二、四年というスパンで書かれる方もおられるのだろうが）もたない。ちなみに私は日々こつこつと書き溜めるのがよいという助言をいただいたにもかかわらず、一週間根を詰めて勉強して一か月サボる、というサ

イクルを貫き、その書き方も、章ごとに分けて書くのを勧められたが、出だしから終わりまで一気に書いた。

結局、書けるようにしか書けないのだ。去年の自分を顧みるに、忙しいの辛い何のと言いながら、結構好き勝手にやっていた気がする。

何やら言い切つてしまえば実も蓋もない、実に殺風景な体験記になりつつある。そこで、完成だけが王道と言つておいておかしのだが、卒論を書くにあたつてお勧めしたいことを、いくつか思いつくままに書いてみる。

まず、卒論で扱えるテーマの幅はそれほど広くない。時間も枚数も限られているので、必ずしも自分の一番好きなこと、やりたいことを設定するのがよいわけではない。テーマを決める前に、自分の考えている内容が、四十枚以内で十二月までにまとまりそうなものかどうか、一度先生に相談に乗っていただくのが賢明だと思う。

それから図書館には、別に用がなくても頻繁に行つてみるのがよい。回りの進み具合を見ることで、外から自分を追い込むことができる。その際あまりにも順調に飛ばしまくっている人を見掛けたら、憎らしいので、食事にでも誘い出してちよつと牽制してみるぐらいのことは許されると思う。おそらく。

テーマも決まり、資料の見当もついてくると、とかく手当たり次第にコピーを取りがちなのだが、私はむしろ必要な箇所（多少いい加減な選定でもかまわないから）だけを手書きで写しておくことをお勧めしたい。コピー代の節約にもなるし、多く書き取るのは面倒だから、資料の取捨選択作業を同時に行うことになる。何より手で書けば内容が頭に残るので、一見非効率的に見えて、実はあとで資料整理の手間が大幅に省ける。ただし、何かしら書き物をするともものすごく勉強したようなエセ達成感を覚えてしまう危険があることをお断りしておく。

そうして雑駁に蒐めた資料は、おおかた秋を迎える頃には、溜まりに溜まってわけがわからなくなる。何が使えて何が使えないのか、手っ取り早く判断するためには、まず書いてみるとよい。構成や文章の善し悪しはさておいて、とりあえず三十枚、資料はうる覚えだったり、あるいはこれからこういったものを探して載せる、という箇条書き程度で充分なので、なるべく早い段階で清書と等量の本文を作っておくとあとが楽だと思う。書きながら論証の脆いところや、構成上の欠点もわかってくる。溜まりすぎた資料も八割方棄ててしまえる。一度草稿ができてしまえばあとはひたすら推敲するだけなので、作業的がぐっと絞れる。とにかく試行錯誤を重ねて、自分の一番書きやすい方法で書く

ことだと思ふ。どうせ締切はすぐに来る。

最後にこんなことを言い捨てるのは申し訳ないようだが、卒論は（というより締切のある書き物はおそらくすべて）どうしても見切り発車にならざるをえない。提出後に私が得たのは達成感ではなく、虚脱感と怒濤の後悔だった。ただ、論文そのものの出来はともかくも、何となく入学して、何となく過ごしてきた大学生活の最後に、とりあえずひとつ、大学生らしいことができたという思いに、わずかに慰められるところがあった。それが私が卒論を書いた意義といえれば意義であり、「体験記」として語る価値がもしあるとすれば、その納得の一点においてだろうと思う。

卒論体験記

大国卒 藤井美幸

私が卒業論文について初めて話を聞いたのは、一回生の国文学基礎講座のときだった。その講義中、卒論の目的とは「新説の発見である」と教わった。その瞬間、私は自分で書き上げられる気がしなかった。夢と希望を胸に入学したキャンパスライフが、卒論が書くことができないかもしれないという、不安におそわれた

のである。しかし、私は幸いにも楽天的な性格であった為、そんな不安は忘れ、大学生活を思う存分楽しんだ。

そして、四回生になりゼミで卒論のテーマを考えるようにと指導を受けた。私は、高校生のときから、源氏物語が好きであったので、研究する作品は自ずと決まっていた。テーマは、前から疑問に思っていた葵上が和歌を詠まない理由について書くように考えていた。ゼミで発表すると「書きたいなら書けばいいけど、そのテーマじゃ難しいよ。」との一言を先生から頂いた。これは、ショックの上なかつた。卒論が書けないと、卒業できない。難しいと言われたテーマで、つき進む勇氣はない。どうしよう…と思っているうちに、教育実習が始まった。実習校では、古文も現代文も担当していて、古文の教材研究をしているときに本を読んでいた、疑問が生じた。「何で、源内侍は、女性なのに人前で歌ってるのだろう？この催馬楽という曲は一体？他の女性も歌ってたっけ？」と思い、この疑問は卒論に書けるのではないかと、ひらめいた。そして、先生の考えを伺ってみたら、「おもしろいんじゃない？」とのことで、テーマは無事、『源氏物語』における女君への催馬楽引用』に決定した。

テーマが決まったのは、六月末であったので、夏休み直前頃から図書館で調べるといふ作業が始まった。源氏物語事典を使用し

て、源氏物語において催馬楽で表現されている場面を全てピックアップしていった。この作業だけでも、大変多くの時間を費やした。そのピックアップしたものを分類ごとにし、そして女性に対する表現に分けていった。このとき、催馬楽が引用されている女性に、傾向があることに気づいた。この傾向とは、女性の立場と血筋で、皇室が絡んでくる者に対して催馬楽が引用されているのではないかということで、これは私の論文の軸になることになった。この時点で、後期が始まった。

後期が始まると、源氏物語の周辺物語についての催馬楽引用を探し出し、源氏物語の催馬楽引用と対比させたり、史実と対比させたりという作業を始めた。他の物語から催馬楽引用を探しだすのに、大変苦労した。源氏物語のとき参考にした引歌索引のようなものは数少なく、しかも作品中の催馬楽引用も少なかった。で、作品から該当部分を見つけだすのに非常に時間がかかった。十一月の初旬に調べた文献を整理して、先生の研究室に押しかけた。すると先生は、「書かないと足りないところがわかりませんよ。」とおっしゃられたので、とりあえず書いてみることにした。書き始めると、自分の考えが一体何なのかよくわからなくなり、パニック状態になった。十一月末日が、内容に関する質問の〆切り日だったので、十一月中に下書きを作ろうと必死でパソコンに

向かった。すると、十一月三〇日夜明け頃、下書きが完成した。しかし、最低三〇枚書かなければいけないのに、二十七枚で終わってしまった。もう半泣き状態になり、質問どころではなく、とりあえず学校に行き先生にそのことを訴えた。先生は「しかしをしかしながらにするとか、読点を増やしてがんばれ！」と励ましてもらい、「書いたばかりだから、一日空けて頭をリセットして読み直したら、論文に何が足りないか見えてくる。」とおっしゃい、私はその通りに実行した。そうして何とか三十三枚ぐらいに増え、枚数はクリアできた。

そして、清書が始まった。図書館分館地下一階には、知っている顔だらけで、皆うなされたように卒論を執筆していた。その頃、卒論についての色んな噂が飛びかった。その噂に皆心配しなかったのだが、噂は噂なので、今考えると悩まなくてもよかったと思う。提出〆切り日二週間前になると、発病する人たちが増える。嘘のように感じるだろうが、本当の話だ。胃を痛める人、頭痛を訴える人、症状は様々だった。私も三十九度の熱を出し、注射を打って卒論を書いた。たぶん、皆、卒業しなければいけないプレッシャーと、噂に翻弄され、病んでいたのだと思う。パニックになったり、落ち込んだりするの、皆一緒なので、お互い励まし合いながら卒論を書いていった。清書が完成し、教学課とア

ドバイザーに提出したときの解放感は、とてつもなく大きかった。

最後に、わけのわからないことで悩みまくり、その度に研究室に押しかけ、なだめて下さった坂本先生、一緒に図書館やロビーで励ましてくれた友人たちに感謝の気持ちは語り尽くせない程大きい。

——本当にありがとうございました。

優秀論文発表会に参加して

大國一 西田 優子

私はこの感想を書くにあたり、ある先生がおっしゃった「人生はポキヤブラリーだ！」という言葉をしみじみと感じた。何を表現するにも語彙が無ければできないのである。

人に意志を伝えるときもまたしかり。それは我々も小説の中の登場人物も変わらない。が、《野上弥生子論—沈黙の作用—》を書かれた内田さんは言葉のやりとりの無い部分に注目された。我々が本を開けば文字をただ追ってしまう。しかし、内田さんはまるで空白の部分透过すかのように、沈黙という一つの舞台を読み

取りまるで透明な蝶を標本にするが如く、あらゆる作品から提示された。そこで見えてくるのは、沈黙は意志を持つということである。言葉のやりとりが無くとも人の感情は動く。いやむしろ言葉に発しない方が人はたくさん複雑で強烈な思いがあるとも言える。また作品を一つの音楽とするなら、沈黙は一つの音となる。その音は小さくともずっと響き続け、時に不協和音となり、主旋律を破綻させるところまでも行き着くのである。

『源氏物語』における女君への催馬楽引用』を書かれた藤井さんの論文では、催馬楽（上代の民謡などに曲調をつけて宮廷へ雅楽として持ち込まれたもの）が物語中で女君とどのような関係があるかを調べられた。すると引用の有る女君と無い女君に別れ、しかも有る女君には重要な共通点が、無い女君に関しても一定の条件が見つけだされた——と聞いたとき私は一つの謎解きのような面白さを感じた。未知のことを探り当てるに至ったこの主題はどうやって見つけたのだろう、と質問をすると次のような答えを頂いた。

初めは「葵の上は何故和歌を詠まないのか」というテーマで行こうと思っていたのが「答えのないものは難しい」という先生の一言で白紙に。そんな時、教育実習での古典の参考にと「あさきゆめみし」という源氏物語のマンガをコピーすべく見ていたら、

「催馬楽」の文字を発見。催馬楽って何？というところから始まったそうだ。意外だったのは、それまで催馬楽というものについて詳しく知っておられた訳ではない、ということ。でも、この研究には原文を漏らすことなく全て読むことが必要。ただ圧倒された私は、源氏についてどのくらい詳しくあったのか、と気になり質問すると、原文を読み始められたのは三回生の末からとのこと。しかし、他作品との比較もやっておられ、言うまでもなく、論拠になる文献を捜し当てる作業が大変だっただろうと思う。

『頼朝及び義経像の形成に関する一考察——『平家物語』における——』を書かれた高橋さんの動機は「私は源頼朝が好きだったので」という理由からだ。『義経——好漢、頼朝——悪漢』人物像の形成の源流は「平家物語」にあるのではないかと調べられた論文は筋道が通っている。情緒的部分に目が行きがちな「平家物語」で物語世界の絶対的秩序を照射し、なおかつ平家と源氏との経済基盤の違い、そして義経を通して浮かび上がってくる武士像は、今なお日本人の好む英雄像に通じるのである。また、頼朝が確立した所領絶対性ともいえる経済構造は徳川家、すなわち封建社会の終焉まで封建制度を支える価値観として生き続けていると感じた。お話をさせていただく機会があり、高橋さんの好きな作家は司馬遼太郎とのことで、文学を歴史的側面から見られたのはその

影響もあると思う。

他に参考になったのが「コピーを取っただけで読んだ気になつてはいけない」ということである。また、気になる箇所はどこに書いてあったかをメモして書き写す方がコピーをとるよりも良いのではということ。そして、一つのテーマで長く書くのは大変ではないかという質問には、高橋さんは、自然と長くなってくるので、むしろ削る方が大変で、書きたいことを書こうとすると自然とそのくらいの枚数が必要になってくるという答えだった。

テーマの決め方は三者三様だが、心に残った内田さんの言葉があるので紹介して終わりたい。「人は作品に自分の足りないところ、自分には無い物を求めるのだと思う」内田さん自身、人と話すのが苦手で、そこから相手に自分の意志をどう伝えるかという点につながっていった。「まず、作品に対する漠然とした興味があり、そこからどうして自分にとって面白いか、どこが面白いのか、を考える。そのときに浮かび上がってきたことを自分自身が文章にすることで心の整理が出来るんです。」

自分の心と向き合うことから論文が出来たということ、実際に書かれたご本人から聞いて初めてわかる貴重な言葉だ。また自分は何を求めて作品を読むのだろうと考えさせられた。

優秀論文発表会に参加して

大國四 小堀 由美子

去る五月七日、穏やかな昼下がりに優秀論文発表会は行われました。発表者は藤井美幸さん、高橋小百合さん、内田舞さんの三人で、藤井さんは、『源氏物語』における女君への催馬楽引用、高橋さんは「頼朝及び義経像の形成に関する一考察―『平家物語』における―」、内田さんは「野上弥生子論―沈黙の作用―という題目で、卒論の内容をまとめたレジメを作成し、それについて発表して下さいました。

藤井さんの発表は、題材が『源氏物語』でしたので、私達文学少女には興味深かったです。膨大な長さの本文から、女君への催馬楽引用を見つけそれをデータ化及び比較・検討する作業には苦勞されたと思います。しかしそのおかげで私達は『源氏物語』へ今までにないアプローチができました。

高橋さんの発表は題材が『平家物語』の頼朝・義経像についてでした。今年の大河ドラマは義経で、映像でその世界を楽しめませんが、高橋さんの発表では世間の「ヒーロー義経像」が形成された理由や、頼朝・義経の実際について述べられており、今まで知

らなかつたことも知ることができ、とても有意義でした。

内田さんの発表は近代の女性作家野上弥生子さんの作品中にみられる沈黙がどのような意味を持つのかというものでした。「野上弥生子」という作家を知りませんでした。内田さんの発表を聴いたら、作品を読みたくなりました。そして、「沈黙」という言葉もしくさも使わずに伝えるものについて、考えさせられました。

三人の方の発表はとてもわかり易く、興味深かったです。そして三人の方に共通する点として、努力して真剣に論文作成に取り組んでいらつしやるということが挙げられると思います。藤井さんは四月に『源氏物語』の全文を読んだと、高橋さんは資料集め、論文の内容をまとめるのに苦労したと、内田さんは野上弥生子全集を購入し、読んでいったとおっしゃっていました。やはり、一生懸命に取り組むことが大切なのだ実感しました。

優秀論文発表の後には、論文発表者の方や先生方を囲んでの懇親会が行われました。お茶とケーキをいただきながら、発表者の先輩や、院生の先輩方と直接お話しできるといふ貴重な機会でした。四回生の皆はここぞとばかりに先輩方を質問攻めにしていました。

社会人・院生となった先輩方がわざわざ私達のために本学に来

て発表してくださったこの機会を無駄にせず、これからの論文作成に役立てていこうと思います。

京都女子大学に入学して

大國一 今井 ひとみ

私が京都女子大学に入学して数ヶ月が経とうとしています。スーツを着て登った女坂は普段よりもゆるやかで、まるで私達を迎え入れてくれるようでした。しかし、その時の私はあまりの人の多さに驚き、当惑していました。こんな沢山の人の中で自分の存在はかき消されてしまいはしないだろうかと不安を感じていました。そんな中、私に話しかけてくれる人がいました。その人が私の初めての京女の友人となりました。会話を重ねることにこぼれる地方訛りに私はどれだけ心を癒され、親しみを持ったか知りません。学友の輪は日に日に大きくなり、今では私の周りは温かな笑みでいっぱいです。そして今、私にとってこの多くの学友たちと出会えたことが、京都女子大学に入学して良かったと思える一番の理由です。

大学では、高校までの学校側に与えられた時間割りを受けるの

ではなく、自分の興味のある授業を選び、自分で作った時間割りにそつて学ぶことができるので、講義に意欲的に取り組みます。そしてその講義ごとに同じ興味を持った学友たちと交流することがとても楽しく、熱心に講義をきく友の姿を見て自分も頑張らなければと互いに切磋琢磨できることを嬉しく思っています。

また、私はこの京都女子大学で社会人学生の方とも出会うことができました。私たちよりも明確な目的を持って講義をきいていの方の隣で学べることは、私にとって今まで経験のない刺激となっています。そして私は社会人学生の方々とき学友として付き合うと同時に人生の先輩として色々な相談にもものつていただき、女性としても多くのことを学ばせてもらっています。

このように常に私に最高の学びの場を与えてくれる学友、そして京都女子大学はとても居心地の良い所です。私は京都女子大学で近代文学の勉強がしたいと思ひ入学しました。高校の時に部活の演劇部の公演で宮沢賢治氏の「銀河鉄道の夜」に取り組んだ時に、宮沢氏の世界観とことばの美しさに魅せられたのです。入学当時は近代文学にしか興味がなかった私ですが、今では近世の近松門左衛門の講義をきき、人形浄瑠璃に大変興味を持つたり、日本各地から来た学友たちと話す度に触れることのできる方言に関心を持っていたり、私の可能性は広がるばかりです。

私の京女生活はまだまだこれからです。日々精進し、悔いのない大学生活を送りたいです。

京都女子大学に入学して

大國一 松下 貴子

私が京都女子大学に入学して最初に受けた印象は、やっぱり高校とは違うな、というものです。当たり前なことなのですが、最近特にそう感じます。それは良い意味でもあり、また同時に不安な意味も含まれます。

例えば自己管理です。高校までは、軽い病気や怪我でも、親や先生の力を借りることができました。しかし寮に入り親元を離れた今、そのような自己管理はほとんど自分の責任です。また、病気や怪我のように特別なことでなくても、掲示板のチェックや様々な手続きなど、自分から動かなければ誰も教えてはくれません。これらのことは日常生活において常に不安なことでもあります。

しかし同時に良いこともたくさんあります。自分の行動の全てを自分の意志で選ぶことができます。好きな分野のみを選んで学

ぶことが出来るし、好きなサークルを多くの選択肢から選び出すことも出来ます。大学に入って一番嬉しかったことは、選択肢が大幅に増えたことです。それは同時に多くの責任を伴うことになりませんが、自分で選び出す自由を得たことは、とても大きな喜びです。

また、寮に入れたことも良い経験でした。高校の寮とは違い、あまり規則に縛られることがありません。先輩方も優しく、テストや授業の内容などをとても詳しく説明して下さいました。寮に入らず下宿を選んでいたなら、初めてのことやよく分からないことだらけでずっと四苦八苦していたことでしょう。今の自分の選択に満足だと言えるのは、寮の先輩方のおかげだと思っています。

大学に入って一番変わったことは、遠く離れた家族に対する考え方です。地元である九州と大学のある京都との距離を考えるとなかなか帰ることができず、入学以来一度も会っていません。さすがに少し寂しさがこみ上げてきます。しかしそうしたことで、高校まではあまり感じることもなかった家族の大切さを深く感じることが出来ました。夏の長期休暇に帰った際には、家族に対して今までは少し違った接し方が出来るような気がします。

大学生になって約三ヶ月、すでにたくさん壁に突き当たりました。自己責任への不安や地域の違いによる対人関係の悩み、

ホームシックや勉強への苦手意識。しかし、それを打ち消してくれるくらい多くの喜びに巡り会えました。先生方や先輩方、そして友人たちや家族の支えを借りて、これからの大学生活をもっともつと有意義に過ごせたらなと思っています。

京都女子大学に入学して

短国一 宇 吹 早也香

通学時間は一時間半。朝は、激しく込み合い押しつぶされる座布団やクッションの気持ちをお腹一杯になるくらい経験することとなり、人生ってなんだろうと柄にも無いことを延々と考えてしまう魔の時間がついてくる。にもかかわらず、私はこの大学を選んだ。

京都女子大学の周りにはたくさん寺院がある。少し足を伸ばせば靈感が強い人は気持ち悪くなるらしい稻荷神社もあったりする。環境は良いと思う。難点を挙げれば周辺に娯楽施設と呼ばれる類のものが皆無なさだろうか。友達とカラオケ、映画に行きたくてもなかなか実行に移されない一因だと私は睨んでいる。体力が無くて休みの日に誘われてもボイコットしまくりと言うのは

「かわいそうに……」で流してください。突っ込んだら負けですよ、お客さん。

私は京阪を利用してあるので、博物館の前を通り長く苦しい女坂を重たい鞆を担いでえっちらおっちら歩くこととなる。女坂登山の朝は辛い。特に時間の無い一講時目からの日なんてイジメ以外の何者でもない。そして「エスカレーターつけて欲しいなく」などと妙な空想にふけていると、決まって横をプリンセスラインと言うJR京都駅発のバスがスーツと走って行くのを歯軋りしながら眺めるはめになる。しかも後でプリンセスライン利用者に「登っているの見たよ」なんて言われた日には、歯軋りどころの騒ぎではない。某仏教学教授の言葉を借りるなら、まさに窓から飛び出したくなる。空想時にニヤケル顔ほど他人に見られたくないものは無い。まあ、生憎なのか幸運なのか定かでは無いが、私は高所恐怖症のため飛び出すことは今だ実現にはいたっていない。

その坂には色々な飲食店が並んでいる。空腹時は凄まじい誘惑効果があったりするが、赤貧の私には縁遠い。そのため食事は大部分が大学の食堂で行う。安い、美味しい、早い、三拍子揃った食堂はありがたい。仲の良い友人達と談笑しながら更には美味しくかんじる。話が脱線し掛けているので取り敢えず補正を……

えーっと、そうそう大学の話である。

私が居る国文科と言うのは、まさに文字通り国文を学ぶ学科である。私がこの学科、某教授曰く「やくざな学科」を選んだのは、国語が好きなきともあるが、将来物語の作り手に成りたいという野望があったため、物語を作るならば多種多様の物語を理解すべきだ！と勝手に思いこんでこの学科を選んだ。

国文科なんて古臭いし新しいことなど無いのじゃないの？って思っている方が居たら、その解釈は取り下げ、事を私はお勧めしたい。確かに論じる題材は源氏物語や枕草子など古い以外のなんでもない。しかし、私は毎回授業の度に凄まじい衝撃に出会っている。今まで小学校……いや、受験のために必死に学んだ事柄がまったく違ったりするのである。

例えば古今和歌集の中にある歌の解釈一つを取り上げても多種多様で、恋の歌だ！とか夏の季節を歌った歌だ！とか、ばらつきが存在する。たくさんある資料を眺めるとその奥深さや多様性による神秘的な側面に触れることが出来る。まさに、古典は今なお全てが解明されていない学問なのだ。ずっと遙か昔から研究されているにも関わらず、その謎は解明されていないことの方が数多あるということは、かなりの衝撃だった。そして私の知識欲を激しく刺激し、通学時間は一時間半がまったく苦でなくなつた。

それが、私がこの学科に入って強く感じたことである。

京女に入学して

短国一 福濱麻実

京都女子大学には、入学するまで来たことがなかった。合格できるとも思っていなかった。ただ、国語・国文を勉強するならば、京都や奈良など近畿地方周辺がいいな、と思っていた。そう思うようになったことに、これと言った理由はない。駄目で元々で受験して、運良く受かってここにいる。京都で国語・国文の勉強をすることができている。

京女に来てみて、京都がよいと思うようになった理由をみつけることができた。

私には中学生の頃から好きだった和歌がある。古今和歌集四〇七番、小野たかむらの朝臣の

「わたの原やそしまかけてこぎ出でぬと人にはつげよあまのつり舟」

小倉百人一首に参議篁の名で選ばれている歌だ。この歌を何故好きなのかは分らない。しかし、きっと流されていくあわれさよ

りも、「流人」であることを感じさせないほどの雄々しさと勇ましさをより感じるからだろう。はっきりした理由はないが、好きな歌だ。この歌を好きになることは、私が小野篁その人に興味を持たせる原因となった。

あれは、四月半ばの木曜日だった。午前中に空時間があつたので、銀行での用事を済ませた後、寄道をした。「六道の辻」と彫られた石碑の指す方に誘われるように入っていった。そこで六道珍皇寺を見つけた。その寺には、小野篁の墓、紫式部の墓があるのだと聞いたことがあつた気がする。表に出てみると、門前に、「小野篁卿墓跡」と彫られた石碑を見つけたのだ。それを見つけた時、嬉しかった。真近で有名人を見ることができた、ミハーな女は、きっとこんなふうであろう、と思った。それはとても掴み所のない喜びだった。

また、京女のある東山七条周辺は、豊臣秀吉を始めとして、豊臣三代と所縁のある土地であると言う。私はそのことを購読近世の授業で聞くまで、まったく知らなかった。京都国立博物館横の豊国神社。何より、豊臣家の繁栄を象徴し、亡滅へと導く方広寺。東山七条は、豊臣家の栄枯盛衰を、真近で見詰めてきた場所なのだろう。

京都は、古代王朝文学が発達してきた場所でもあるが、日本の

歴史という視点から見ても、要であるのだ。

こんなふうには、今はまだ、正直に言うと、特に「京女」に入学して云々ということは、私にはない。私が京女に入学して思っていること。それは、「京都」でいること、に相違ないのだ。京都には、歴史的、文学史的に有名な土地、人々に関する場所がたくさんある。それらを間近かにして、勉強できることを、今は喜びとして感じている。

大学院体験レポート

大学院博士前期一回生 藤野智子

私がこの院に四月に入学させていただいてから、いつの間にか二ヶ月が経とうとしています。今回このような原稿のご依頼を承り、果たして私の体験が誰かの参考になるものかどうか、一体どう書いたらいいものかと途方に暮れました。赤裸々に書かせていただきますので反面教師的な意味合いで参考にしていただければ読み方として間違いないと思われまます。

進学動機

将来はどこかしらで国文に携わっていただける職業に就きたい。

それならば教員採用試験を受けて教員にでもなるか。そんな楽天的な私の将来設計は五月に行われた教育実習でいきなりガツンと打ちのめされました。どうも、教育においても、また学問においても自分は半端だ、生徒の前で自信を持って話せる内容がない、このままでいいのだろうか。そう迷いながら臨んだ教員採用試験は散々な結果で、講師登録をするのにも躊躇してしまいました。大学院進学を最終的に決めたのはそんな四回生の夏でした。もう二年間勉強して少なくとも専門分野に関しては自信を持って話せる自分になりたい。そんな思いが極まっていた院進学でした。

入試体験

院試を受けようと決めたのは夏でしたが、司書の採用試験などにも挑戦していたため、実際私が具体的に入試のための勉強を始めたのは九月頭だったように思います。合格した以上、こういう受験勉強法は効果がある、ということを書けるべきなのでしょうが、改めて振り返ってみても、私の試験答案は散々だったとしか思えず、このような私が勉強法などを語るのは赤面の心地がします。具体的な方法などは割愛させていただきます。傾向は他の方の体験記や過去問など見て参考にしてください。

入学してからの体験

学部頃と比べ院では格段に演習発表の割合が増えました。ま

たその発表のための自学時間も増えました。受身でもなんとかなっていた学部講義とは違い、院では自ら問題意識を持たねばなりません。読むだけでは駄目、資料を集めるだけでは駄目、そこから何かを見つけ出さなくては…そういうことを今強く意識しています。

知識が足りない焦り、問題点が見つけれない歯がゆさ、上手く論理が組み立てられない苛立ち…など、この分野が好きで院に入ったものの、至らない自分に失望すること多々あります。しかし毎日の講義や自学で得る新たな知識や発見には、落ち込んでいる暇もないくらい胸踊らされるのです。学部の時とは比べ物にならない程、今、毎日が楽しいです。

来年には修士論文が控えています、二年というリミットに背中押されつつも、着実に出来ることを積み重ねていきたい、そしてそれが自信へと繋がってほしい、そう考えています。

大学院に進学して

大学院博士前期一回生 上田 真理子

今回大学院進学に関する文章を、と先生にお話を頂いた時、正

直などころ即座にお断りをしたかった。なぜなら、院進学に関して自分自身いまだに迷っているところがあり、そのような中途半端な私が一体何を語れるのだろうかと思うからだ。経験でも動機でも進学して思ったことでも何でもいいと言われお受けした話ではあるが、いざ、書くにあたり、私にも伝えられることは何だろうと考えた時、本当に困った。何を書こう。いや、何が書けるのか・・・入学後に私が思ったことを書こうと思う。

さて、大学院に入学して、二ヶ月ほどであるが、その間私がよく考えたことは二つある。ひとつは、学生を続けている自分は何をしているのか。もうひとつは、私は大学で一体何を勉強していたのか、ということだった。前者は就職して初任給をもらう友人と院進学により学生を続ける自分を比べたなんとも無駄な焦りであり、後者は現在進行形で続く学部時代の後悔であり、猛省である。

大学と大学院の大きな違いは、まず講義が先生対数名の学生という少人数の演習形態で行われるところだろう。また、研究室では先輩方と机を並べているので、自ずと先生方、先輩方個人とお話をする機会が増えるのであるが、そうした会話のなかでその知識の引き出しの多さと深さに驚かされることが多々あり、比べて自分は…と自分の浅さと半端さを痛感すること数知れず…。

加えて、講義という名の演習が多く、調べることが多いので、そうした際にもやはり力不足を思うわけで、この二ヶ月そのような感じでもかく落ち込むことが多かつたように思う。

そんな二ヶ月を過ぎて、院の講義にも新しい生活にもようやく慣れてきて思うことは、そんなことで迷っている暇などないということだ。院ではわずか二年という限られた時間の中で、日々の講義をこなしつつ、修士論文を仕上げねばならないのであり、無駄な悩みに時間を割いている余裕などないのである。自分の考えて選んだ道を他人と比較して今更悩むことは（時と場合にもよるけれど）無意味である。後悔、反省は同じことを繰り返さないためにするのであって、自分に専門知識が乏しいのは事実、今後の努力の問題なのだ。日々反省結構なことではないかと思う。院に進んだら多少の違いはあるけれど開き直りが必要なのではないだろうか。そう思う。

以上、自己弁護的に勝手なことを述べさせて頂いたが、大学院に進学する学生に共通して必要不可欠なものは、研究目的とやる気だ。この二つがあれば諸問題起こっても何とかなる。できる。と私は思っている。何事においてもそうであるが、自分の選んだ道を貫くには多大な努力と少しの勇気が必要だろう。文学部の大学院生に対する私の周囲の評価は決して好意的とは言えない。誰

かに反対されたり、自分自身が自分の選択に疑問を持ったり。そうしたことが進学後の私の悩みの種である。今後の道もいまだ決めきれずにいる私ではあるが、今はまず、進学時の目標を果たし、進学を次へのステップにしたいと思っている。

私の院進学までの経緯

大学院博士前期一回生 中川 由利子

大学時代、私は院に進学するとは夢にも思っていなかった。自分がなにをしたいのか、自分がどう生きたいのかあまり真剣に考えていなかったからだ。三回生になると周りに流されるように就職活動を初め、漠然と企業的一般職を希望していた。四回生の六月に銀行から内定が来た。今振り返ると、周りに完全に流されているパターンであり、もっとも就職活動でははいけないといわれている行動である。お恥ずかしい限りだが、今から大学卒業後の進路を考える後輩のために院進学までの経緯を素直にここでは書こうと思う。今、院進学を考えている人、また将来について漠然と悩んでいる人に少しでも私の文章が参考になれば幸いである。

さて、とりあえず内定をいただいから私は高校に教育実習に行った。これも大きい声では言えないが、免許が欲しかっただけでどうしても教職に就きたかったわけではない。しかし、二週間の教職が今後の私に大きな影響を及ぼすことになる。

教育実習は予想以上に、ハードであった。毎日教育実習生の誰かが泣いていた。私も毎日なんらかの失敗はするし、生徒とうまくいかないこともあった。だが生徒達との距離が縮まり、ひとりひとりの可能性や素晴らしい個性に触れるにつれ、教職の魅力を感ずるようになった。最終日、生徒達がしてくれたお別れ会は今も忘れられない。二週間が過ぎた時、私の気持ちになにかが芽生えた。

慌ただしく、二週間が過ぎ、卒論におわれながら、私は迷っていた。方向転換して、教職を目指そうかそれとも企業に入るか。だが、私は結局卒業の段階で会社員を選んだ。たまたま三月に受けたメーカーから内定がでて、条件が良かったのでそこに決めたのだ。焦りもあつたと思う。そしてなにより中・高の国語の教員採用がまだ少ない今、何年も正職員になれない状態もありうることを覚悟しきれていなかったのだ。だがこの決断が結局は私の教師になりたいという覚悟を決めることにもなった。私は三月から研修に入り始めた。研修を通して自分の将来設計に触れるたび、

これで本当に良かったのかという疑問が今更ながら沸々と沸いてきたのだ。悩みに悩んだ。中学時代からお世話になっている恩師の言葉が私の背中を押した。「このまま会社員を続けるなら、教師はあきらめなさい」。内定を辞退し、ゼミの指導教授であった海老井先生の研究室を四月下旬訪ねた。そこで先生から院進学を勧められ、五月に一念発起して受ける事を決意した。

長くなったが、ここまでが院進学を決意するまでの私の経緯だ。その後十一月の試験まで、週四日塾の非常勤講師をしつつ、院に向けて勉強した。不安だったがもう進むしかなかった。勉強の方法は、とにかく英語は長文に慣れ、忘れていく構文、単語を大学受験の時に使ったテキストで覚えなおした。そして国文の、特に近・現代の知識は本を幅広く読むことによって少しずつ蓄えた。テストを不安に思っている方も多いと思うが、やる気があれば大丈夫である。私もなんとか合格できて、今にいたる。

現在勉強は大変だが、勉強できることの幸せをいつも忘れないように思っている。みなさんも、特に四回生は不安が多い時期であると思うが、自分を見つめる機会を大切にしたい。最後になつたが、この場を借りて、両親、先生方をはじめ今まで私を支えてくれたすべての人に感謝の意を述べたい。

女子大國文

第三百二十七号

平成十七年六月十五日 印刷
平成十七年六月三十日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地
編輯兼 發行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五・五三一・九〇七六
FAX 〇七五・五三一・九一二〇
振替 〇〇八〇・五・三二四

〒603-8204 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五・四一一・四一〇八代
FAX 〇七五・四三三・六二八二